

1. 学習のアドバイス — 充実した高校生活を送り、将来に備えるために

(1) 日々の学習について

① 授業を大切に

学校の授業が一番大切です。高校の学習は、とても量が多く、進む速度もとても速くなります。集中力を持って臨みましょう。

1年生の1学期はどの科目も中学の総復習や高校への橋渡しの内容となっています。そこで高校の勉強を甘く考え、手を抜く生徒もいます。しかし、段々と勉強が難しくなりますので、その学習態度が直らないままでは後がとても大変になります。この1学期にもう一度中学の総復習をして、5教科の基礎をきちんと固めましょう。逆に苦手な科目も克服するチャンスです。しっかりと授業を聞き、授業に参加しましょう。

② 特製のノートを作ろう！

授業のノートをしっかり取るのはもちろんですが、先生の板書したことをただ写すだけでは意味が半減してしまいます。そのまわりに余白を十分にとって、自分なりの疑問点や先生の話もメモしておくといよいでしょう。

③ 参考書・問題集は自分の一番気に入ったものを選ぼう！

参考書・問題集などは、まず学校で購入したものを徹底的に活用することが大切です。より基礎的な内容のものや、またはより難度の高いものが必要な時は、まず教科担当の先生に相談してみてください。その上で実際に書店に足を運び、自分に合うものを選び、一度決めたら100%理解するまで利用しましょう。あれこれ目移りしてたくさん購入しても、結局、全てが中途半端になってしまっは意味がありません。

④ 先生を大いに利用しよう！

分からない点などが出てきたら、積極的に先生に質問しましょう。疑問に思ったところは多くの生徒もそう思っているものです。恥ずかしがらずに質問してみてください。その質問をもとにまた分かりやすい授業が展開されます。

⑤ 家庭学習が将来の進路を決める！（授業の予習・復習を中心に毎日やろう）

毎日、家庭学習をしましょう。「そんなことは嫌だ、無理！」と思ってしまう人は、1年、2年でアルバイトや遊びに夢中になり、2年での進路選択や3年での進路決定の時に何を具体的に考えてよいか分からなくなってしまいますよ。授業で理解できたつもりでも、家庭学習が不十分だと、すぐに忘れてしまったり、曖昧な覚え方をしたり、応用力がつかなくなったりします。毎日2時間の家庭学習をしようと言いたいところですが、「まず30分」から始めてみましょう。その30分を2コマ、3コマ…と次第に増やしていくことができれば、予習と復習がしっかりとでき、知識の定着と活用ができるようになります。2時間はあっという間です。予習では明日の授業の内容を大まかにとらえ、疑問点をつかんでおき、授業でそれを確認し解決します。そして復習で再確認し応用をしてみます。このサイクルをぜひ確立させましょう。このサイクルが習慣になると必ず成績は向上し、目標をさらに高いところへ設定できるようになります。自分の未来が開けてきます！自分の夢を現実のものにできます！

⑥ 補講に参加しよう！

塾、予備校がはやっています。学校での勉強を補強する意味でそこへ行くのもよいでしょう。しかし、本校では、朝学習、土曜講習、長期休業中の補講などが展開されています。朝学習で手を抜かないで頑張り、補講に積極的に参加して、普段教わって

いる先生だけでなく教わっていない先生からも、より深い補講を展開してもらいましょう。その上で塾、予備校を考えましょう。

⑦ 長期休業中の学習は計画的に

目標を立て、計画的に学習を進めましょう。だいたい1年生の最初の夏休みで、その後の高校生活が決まっていくでしょう。教科書の復習と課題の完成、そして応用力の強化、苦手科目の克服などが中心となります。補講もあります。参考書や問題集を1冊やり終えてはどうでしょうか。読書もどうですか。

(2) 定期テストへの対策

5、7、10、12、3月の年5回あります。中学時代のテストと比べると範囲も広くまた内容も深くなります。少なくとも2週間前から計画的にやりましょう。学年によって科目数は違いますが、2週間前から行うことによって結果は大きなものが得られます。

定期テストは学習の到達度を測り、基礎学力がどの程度身に付いたかを観るものです。テストが終わった後は、もういいやという考えではなく、必ず解答を検討し、曖昧な部分や弱点を確認し補強して下さい。

成績が低下していく人は必ず早く立て直しをして下さい。自分がなぜ山北高校に通っているのか分からなくなり、どうでもいいやという気持ちになってしまいます。先生方のアドバイスや注意を聞こうとしなくなり、転落していくだけです。

2. 入試システムについて

〔入試の種類〕

- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| ○推薦入試 | 〔指定校推薦
公募推薦（一般推薦・スポーツ推薦・自己推薦）〕 |
| ○特別入試（AO入試） | |
| ○一般入試 | |

1. 大学の推薦入試傾向

ここ数年、受験生減少の影響で大学受験は易化傾向にあると言われていています。数年前に比べれば確かに入りやすくなった感触はありますが、それでも一部の難関校ははっきりとした易化傾向が出てきていません。

推薦入試の内容は学力試験を兼ねた小論文、口頭試問を含んだ面接などの選考方法が定着してきました。今後もこの流れは続くものと思われませんが、学力を全く問わない選考方法は考えられず、英文を読んで内容について述べる小論文、面接での英語を使った自己紹介や口頭試問など、何らかの形で学力を問う形式になってくるでしょう。同時に、英検などの資格を重視し、高校時代の生徒会活動、部活動、ボランティア活動などを重視する選抜方法になってくる可能性もあります。AO入試にこの内容が見られます。

しかし優れた学生の優遇とは別に、早期の生徒募集の手段として推薦入試の名が使われる例が急増しています。「質」＝行く価値がある大学かどうかをよく調べ、合格しやすさの

誘惑に負けず、本来の志望校の受験に向かう強い意思が望まれます。

2. 推薦入試の形態

(1) 指定校推薦入試

大学が、「指定校」(山北高校)に、基準を満たした生徒の募集を依頼し、本校はそれに応え、生徒を選抜、推薦します。試験は面接のみ、または無し(書類審査のみ)。大学が期待する人物像とかけ離れた場合を除き、本校の校内推薦会議を経た時点で合格がほぼ約束されます。

(2) 公募制推薦入試

大学が公表する基準(*)を満たし、受験を希望する生徒を、山北高校が(学校長が)推薦し、出願を認めます。試験は面接、小論文、基礎的なテスト、実技などで行われ、評定平均値も含めた総合的な判定の末、合格が決まります。校内推薦審査は3年生9月末。出願は10月。試験は11月が多いです。

* 評定平均値：3.5以上、欠席：3年間で10日以内、など。

(3) スポーツ・文化芸術活動推薦

運動部、文化部での優秀者の推薦。全国大会入賞歴が主な条件であり、また、スポーツ推薦では、入学後も競技を継続することが前提とされます。

(4) 自己推薦

ユニークな才能、他より秀でた技能などをアピールした「自分の推薦状」を添えて出願します。高校の「人物選抜」はありません。

(5) 資格者優遇推薦

TOEFL(英語を母国語としない人の能力試験)、TOEIC(国際コミュニケーション英語能力試験)、英語検定、漢字検定など、公式の高資格取得を条件に加えた推薦入試。

<出願は専願で>

推薦入試は、「合格後は必ず入学する」ことが条件に含まれており、併願はできません。

2校目の出願は、1校目の不合格が判明した後にできます。

併願可能な大学(推薦入試での合格を辞退できる学校)も数校あります。

<合格後から入学、卒業まで>

出願の時点から、受験の辞退や合格(入学)の辞退は認められません。「第一志望先」が別にある場合は、推薦入試を希望することはできません。指定校推薦入学者は、大学が入学後の成績のチェックを行っており、結果は、翌年以降の指定校決定の参考資料とされています。大学で「単位」を落とすことは許されません。

(6) AO(アドミッションオフィス)入試 — AOを考える生徒は事前に担任へ!

(ア) 試験日程

①大学や短大が求める学生像や目指す方向性(アドミッション・ポリシー)に受験生が賛同し、受験の希望を出します。(エントリーという。正式な出願ではない)

②受験生が「入学して何を学びたいか」を明確にし、志望校側と面談や、レポー

ト提出をします。

- ③大学や短大は、受験生がアドミッション・ポリシーに適合しているか見極めます。(不適合を見なされた段階で不合格、または辞退の勧めがある)
- ④受験生は正式出願をします。(合格と判定されて正式出願というケースもある)
- ⑤それまでの面談・レポート内容、再度の面談・レポートの審査を経て合否発表があります。この間、1～3ヶ月。
6～9月エントリー・面談 ⇒ 10～12月合否発表。

※以上のことをもう少し明確にすると

- ①書類審査 → エントリーシート(受験生の自己紹介)
・志望理由 ・活動記録 ・課題提示と、その解決方法の指導
- ②面談 → 互いを知る話し合い ・課題の進み具合の確認、質問、以後の指導
- ③体験授業、講義 → 授業のレポート提出
- ④課題提出 → 内容説明のプレゼンテーション
- ⑤受験生同士のグループディスカッション

(イ) 選抜方法

学校ごとに様々ですが、およそ次の【論文重視型】と【対話重視型】の二つに分類されます。

【論文重視型】：出願時に論文や課題を提出させ、これに書類審査を含めて第1次選考を行います。その合格者にさらに面接・口頭試問や論文を課し、最終的に合否判定します。

【対話重視型】：出願前に予備面談やインタビューを行い、AO登録・エントリーをさせます。その後、正式出願をさせ、面接・面談を重ねて合否を決めます。

※いずれの場合も、学業成績だけでなく、課外活動(生徒会活動・部活動・ボランティア活動など)、取得資格や特技、本人の意欲や志願理由などを含めて、多面的・総合的に評価して選考するのが特色です。同時に複数の大学を受けられます。

(ウ) 入試対策

- ①志望理由書・面接・提出課題、論文など、あらゆる機会にアドミッションポリシーを理解していること、それゆえに強くその学校・学部を希望していることをアピールします。
- ②学校・学部内容も十分に研究し、理解していること(教育方針、どんな講座があるか、教授陣、他大学との比較特徴)、その内容に対する自己の資質・能力があることを示します。
- ③高校時代に頑張ったこと、主体的・意欲的に課題解決したことを示します。
(どんな努力をし、課題を解決したのか、プロセスを伝えられるとよい)
- ④どのような学生生活を過ごしたいと考えているのか、さらに、将来の仕事について示します。自分の未来の可能性を大学側がどのように評価してくれるかがポイントです。
- ⑤面接・論文テーマの学習をします(書籍、新聞記事)。
ア. 志望学部系統に関連したテーマ
イ. 関連する社会問題(環境問題・高齢化社会・情報化社会など)

ウ. 最新の研究成果（クローン技術・エコ自動車開発など）
など、事実関係と自分の考えを深いレベルでまとめるよう努めましょう。

(エ) その他

- ①学校説明会、オープンスクールには初回から必ず参加し、学校の特色をしっかりとつかむこと（模擬授業などで、「顔を覚えてもらう」のも有利）。
様々なAO入試の形態についての調査・研究をしっかりと行って下さい。
- ②正式出願後は、「専願」=他校を並行して受けられません。辞退はできません。
初回のエントリーシート提出は出願ではありません。面談やレポート（論文）審査が終了した段階で、正式出願となるのが普通であり、出願しないこと（辞退）は自由といえます。出願前までの審査結果を踏まえて出願を勧められる（暗に合格可能性を保証されている）ような場合もあり、推薦、一般受験の難度の高い志望校、第一志望の意思の強い学校への挑戦手段として考えるべきです。
- ③AO入試は、学力試験では評価しがたい個性の発掘というプラス面がある一方で 一般入試合格組との学力差という問題もあり、7割の大学が「入学前教育」を実施しています。その「入学前教育」を必ず受けなければなりません。

3. 山北高校に「推薦受験希望票」を出す

9月中旬に、推薦入試希望者全員について、希望の適否を判断する会議を行います（校内選考会議）。受験を認められた者のみが、その後の出願、受験ができます。

推薦入試は「専願」（=同時に複数校を受けられない）であり、また受験・合格後の入学を誓約して受ける試験なので、この会議以降の辞退は認めません。

入学後の「推薦合格者追跡調査」なども行われ、卒業まで「山北高校の代表者」として前向きに勉学に取り組む強い意思が必須です。

1. AO、推薦を同時には受けられません！

AO入試と推薦（公募制・指定校）入試は、いずれも「専願」=同時に複数校を受けていないことが条件です。即ち、一つの入試の「不合格」が確定しないと、次の受験手続に入ることができません。この仕組みをよく理解し、「山北高校への手続き」と「大学・短大・専門学校への手続きのタイミング」を考え、受験校を選択します。

指定校推薦を、AO入試の不合格結果を待たずに出願することは原則認められません。結果待ちをしていない指定校希望者が9月会議で決定されます（指定校枠の「予約」を認めない=他者の受験機会を奪う）。

2. 「併願可」校の推薦受験

一部で、推薦入試ですが「併願可能」な学校があります（神奈川大、帝京大他）。合格後、入学手続を一定期間待ち、他校の推薦入試受験を認める学校ですが…。

- ①「併願不可=専願」校を同時に受け、両方合格した場合は必ず「専願校」に決定しなければならない。第一希望は「専願校」でなくてはなりません。
- ②「併願可」とは、正しくは「推薦入試合格の辞退を入学手続開始まで認める学校」の意味です。推薦である以上、入学手続をした後の辞退はできません。

4. 一般入試 最近の状況と受験結果

1. 大学をめぐる最近の状況

ここ十年ほどの間、生徒減などによる大学の易化傾向が続き、大学志望者にとってはますます「いい時代」になりつつあります。2009年にはいよいよ*「**大学全入時代**」になりました。ただ「大学に入りたい」ではなく「〇〇大学に入りたい」「△△を勉強したい」「将来は☆☆になりたい」というようなことを真剣に考えることが重要になってきています。

皆さんは、平成23年3月に卒業した大学生の就職状況についてどれだけ知っていますか。高卒の就職も大変でしたが、高い学費を（親が）4年間支払って、就職できなかった学生は…今、どうしているのでしょうか。また、8人に1人が中退しているという現実。彼らは、アルバイト？ ニート？ …

皆さん自身がしっかりと社会状況を把握して、保護者や先生方と相談の上で、志望校を決定して下さい。大学受験に奇跡や偶然はあり得ません。まず学校の授業を大事にし、基礎学力を確実に付けておくことが第一です。

*「**大学全入時代**」：大学志願者数が全大学の定員合計に満たない。すなわち学校を選ばなければ必ず大学に入れるという状況。ただし、それは大学全体として見た時そう言えることで、難関校は相変わらず難しい入試が続いています。大学の二極化と呼ばれています。

★各校が公表する入試日程を見て、第一希望の気持ちの強弱、自分の実力、評定平均などを総合して、AO、推薦、一般受験の受験計画を考えます。順調な実力上昇が自他共に見れば素晴らしいのですが、夏以降、不安が頭をもたげてくることでしょう。高い評定平均を持っている場合、そのこと自体はあなたの努力の成果なのですが、

①指定校の推薦基準には、校内成績上位に設定されているところがありますが、近年では、校内成績「中下位」の者が一般受験で十分に合格している学校が多く、学力のある生徒が行くべきところなのではないでしょうか。

②少子化の中での「早期の学生集め」を意図した指定校が少なくありません。成績上位の者が行くべき学校なのかなどの疑問を感じます。早く決まる安心感と、行きたい学校への気持ちとの闘いには全員が強気で…（正解は後者！）臨んでほしいと思います。

(1) **私立大学**

①大学別一般入試

多様化・複雑化して全大学がこうだ！と一概に言えません。志望校の情報をよく集めて受験勉強を進めましょう。その際に注意したいことは、ある一大学のその学部だけしか受験しないなどということは絶対に避けなければなりません。受験科目の違いなど、他に受験できる大学が無くなり、さてどうしたらいいのだろう…ということになります。また、「入りやすいから」で選択すると、入学後のモチベーションを維持できません。

私大独自入試は1月から出願が始まり、2月に試験が行われます。チャレンジ校、実力相応校、安全校＝滑り止め校のバランスを良く考え、試験日程の重複がないことを確認します。数日間の連続入試を覚悟して可能性にかけますが、体調への気遣いをし、数校の不合格に挫けない気持ちを持って臨みます。

国公立大学前期試験は2月下旬です。私立大学に受かっておいて挑戦したいものです。

②センター試験利用入試

全国共通の統一テストで（文科省）大学入試センターが全国の試験場で一斉に実施す

るマークシート方式の試験。国公立大の一般入試受験生にとっては一次試験にあたり必須ですが、平成 23 年度入試では私立大学でも全私大の約 8 割を超える 503 大学がこの試験を実施しました。

私大を希望する生徒で、この入試を利用する場合は、まず 1 月第 3 土曜日曜に行われるセンター試験を受験します。この際、全ての科目を受験する必要はなく、各大学が指定する科目だけでよく、多くは3 科目型です。合否判定はこのセンター試験の結果のみで判定するところがほとんどです。一度センター試験を受けると実際には大学別の受験をしないで何校でも出願し合否の判定を受けることができます。

入学検定料はセンター試験が 18,000 円（2 教科以下 12,000 円）（昨年度）で共通ですが、大学別に出願する時に納める入学検定料は 15,000～20,000 円程度で、大学別一般入試の検定料（30,000～35,000 円）の半額程度です。多くの生徒が 5～6 校受験しますので経済的といえます。また、同じ大学の学部を一般入試とセンター試験利用入試で併願できるというメリットもあります。

試験問題は基本的に高校の教科書と授業のレベルに沿って作問されており、出題範囲の 7 割は 2 年までで学習したことといわれています。ですから日常の授業を大切にすることが肝要です。なお、2010 年から過去問の再利用の出題を可能としているので、過去問の演習は重要です。

なお、翌朝の朝刊やネット上に発表される正答と照らし合せて正確な自分の得点を知ります（自己採点。模試のような結果の返送がありません）。試験終了翌月曜朝、学校にて自己採点結果を業者に送ります。全受験生の得点分布、センター利用試験の合格可能性判定結果を待って、最終的なセンター利用試験の出願校を決めます（一部、センター試験を待たず出願する学校もあります）。

(2) **国公立大学**

国公立大学の一般入試はまず全員がセンター試験を受験し、その後、各大学で個別に実施される二次試験を受験します。センターで受験する教科は5 教科 7 科目型が主流です。二次試験は書類審査のみという大学・学部もあれば小論文・面接という場合もあり、1 教科型から 3 教科型までまちまちです。

2. 受験勉強のあり方

- ①学校によって要求されるレベルが異なるので、まず志望校を具体的にきめることが先決。実際の志望校よりも、最初のうちは一段高いところに目標を立てて、自分を励まし努力することが必要です。初めから弱気になって志望校を下げてしまうのは、相対的にそれだけ達成感も下がってしまいます。
- ②受験勉強の期間は長いですが、本番まであと何ヶ月などと数えてため息ばかりついているようでは、成果も上がらず、精神的にも参ってしまいます。したがって、数回行う校外模試をそのつど全力投球して達成度を見定め、さらに次回の目標を決めて努力しましょう。この積み重ねを通して、本番まで精神力の持続をはかる工夫が大切です。
- ③自分に適した勉強方法を試行錯誤を重ねながら工夫する努力が自らの力になります。短い時間で最も効率のよい勉強方法を模索してみましょう。この冊子には先輩の体験談が載せてあります。志望分野が違っていても、是非読んで参考にして下さい。
- ④受験勉強の基本は授業です。毎日の授業を真剣に受け、基本事項を身に付けた上で、問題集などで応用力をつけます。その日に学習したことは、その日のうちに自分のも

のとする努力が、何といっても一番大切です。「昨日、習ったことはもう基礎」です。
 ⑤受験勉強の開始は、3年になってからでよいのでしょうか。志望校を具体的に想定した受験勉強は、3年になってからでしょうが、それをスムーズに遂行するためには、基礎学力をつけておかなければなりません。それが出来るのが、1・2年です。1・2年で十分な計画的学習がなされていないと、受験はほぼ不可能に近いのです。

3. 校外模擬試験と一般入試との関係

全国から受験生の集まる大学入試では、その合格可能性を知るために「全国の受験生の中で自分はどの位に位置するか」を知ることが大切です。本校では全国模擬試験を年に数回実施しています。勉強していないし、出来ないから、と言って受けずにいては、いつまでも自分を変えることはできません。どれだけ出来ないかを知ることから自分なりの勉強が始められるのです。進学を希望する者は積極的に模擬試験を受けましょう。

☆合格可能性判定とは…

校外模擬試験を受けると、受験生には後に個人成績表が渡され、たいいてい場合はここに「得点と順位、志望大学の合格可能性」が書かれています。この「合格可能性判定」は基本的にA～Eで表され、その意味は次のようなものです。

- A：今のところは合格圏にあり。このペースで頑張れ。(合格可能性 80%以上)
- B：油断するな。合格圏にもう一踏ん張り。(合格可能性 65%以上)
- C：ボーダーライン。合格圏目指して頑張れ。(合格可能性 50%)
- D：これからの努力でまだまだ伸びる。大いに頑張れ。(合格可能性 35%)
- E：再検討を要す。学習方法を一考せよ。(合格可能性 20%以下)

ここで注意したいのは、A判定とは「受験生が100人いたら80人受かり20人落ちる」率だということ。つまり、A判定だからといって確実に合格するというわけではないのです。また言い換えると、E判定とは「100人いたら20人位は受かる」率だということです。合格可能性に一喜一憂するのではなく、自分の学習到達度の目安と考え、今後の学習の参考にすることが大切です。最終的に志望校に合格することが、皆さんの究極の目標なのであります。

4. 受験科目（進路別系統）

志望校ごとに入試科目は異なります。志望校に合わせて、コースや選択科目を選びましょう。また近年、各校で様々な入試改革も実施され、私大ではセンター試験を入試の一つとして取り入れるところが増えてきました。今後さらに大幅な変化も予想されます。以下の科目内容に頼ることなく、情報収集を積極的に行い、受験勉強をしていきましょう。

私立大学（文系）

学 部 名	受 験 科 目
文・外 国 語	国語・社会（地歴、公民）（1科目選択）・英語の形が多い。専攻などにより、範囲や配点が変わる場合がある。（例えば、国文科は古典、英文科はリスニングを含む、など）
経済・商・経営	国語・社会（地歴、公民）（1科目選択）・英語の形が多いが、社会と数学の各科目から選択できる場合も多い。

社会・人間科学 国際関係 情報など	国語・社会（地歴、公民）（1科目選択）・英語の文系パターンだが、新しい学部なので色々な受験型がある。数学Ⅰ（あるいはⅡまで）が、社会と選択になったり、必修になったりしている。
法・政治経済	国語・社会（地歴、公民）（1科目選択）・英語の形が多い。数学を社会に代えることのできる大学もある。
文系の共通科目	国語はほとんどが国語総合で古文・漢文を除く大学もある。国語総合と、発展として現代文・古典を学んでおくとよい。英語は英語Ⅰ・Ⅱの他に、他科目も合わせた範囲から出題される大学もある。社会（地歴、公民）は現代社会・政経・日本史・世界史・地理から1～2科目出題されるが、大学ごとに指定科目が異なるので、現社の他に2科目は履修しておくるとよい。科目のチェックが大切である。

私立大学（理系）

学部名	受 験 科 目
理	数学・理科・英語が普通。理科は物理・化学・生物などから専攻学科に関連ある科目を受験する。数学は全範囲。
工	理学部とほとんど同じ。理科は物理・化学のいずれか1科目か両方の2科目。
医・歯・薬	理・工とほとんど同じだが、数学の範囲が数Ⅰと数Ⅱ、数Ⅲまでの場合がある。ただし難関である。高得点が要求される。
農・水産	理・工とほとんど同じだが、数学の範囲は狭い（数学のないところもある）。理科に生物が入ることが多い。また、農業経済・食品経済などは、国・社・英の文系科目で受験する。
理系共通科目	数学は、数Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・Bまで履修しておくこと。ただし、農学部は数Ⅱレベル程度まででほしい。

私立大学（その他の系列）

学部名	受 験 科 目
家 政	国語総合・現代文・数学（Ⅰ・A）・理科（化学Ⅰ・生物Ⅰ）・英語（Ⅰ・Ⅱ）など、広い範囲から2科目程度の選択が指定されている。難関の大学ほど科目が多く、また食物栄養系に理・数の指定が多い。
体 育	国語総合・英語（Ⅰ・Ⅱ）・数Ⅰ。また、実技科目が必須であり、重視される。
芸 術	国語総合・国表Ⅰ・小論文。英語（Ⅰ・Ⅱ）。美術・音楽学科では実技科目が必ずあり、学科と同じくらいの比重がある。

国公立大学

学部名	受 験 科 目
全 学 部	センター試験で5教科7科目が必須であるが、学校により科目数が少ない場合もある。また、それぞれの大学独自の二次試験が前期・（中期）・後期に分かれて実施されるので幅広い準備が必要である。

短期大学

学科名	受 験 科 目
文・教養系	英語・国語の2教科型が多い。英文では、英語Ⅰ・Ⅱ・R・Wも。国文では漢文を含まないこともある。
家政・生活科学系	国語総合・現代文・英語（Ⅰ・Ⅱ）・数Ⅰ・Aより選択。食物栄養科では、生物Ⅰ・化学Ⅰが課せられることが多い。
幼児教育・保育系	英語・国語が主。小論文と面接というところもある。

芸術・体育系	英語・国語・実技の3教科が多い。小論文と実技というように、実技が重視される学校が多い。基準点をクリアすれば、あとは実技で決まる。
その他の系統	4年制大学に準ずるが、科目も範囲も少ないのが普通である。

※短大では推薦入試が主流になり、各短大で科目も方法も異なります。一般受験では上のようなパターンで、科目数が少ないのが普通です(平均2科目)。従って1科目そのものを大切にしなければ、合格に結びつきません。

★大学・短大の「実技試験」

- ①芸術系 … 絵画でデッサン、音楽でピアノ演奏や声楽の試験。
- ②体育系 … 基礎的運動能力や専攻の実技能力の測定。
- ③建築系 … デッサンや製図能力の試験。
- ④教員養成系 … 教師としての芸術や体育などの実技試験。

※一般に試験は長時間に渡り、可否をかなり左右します。実技試験の内容や形式については、進路が決まったら早めに芸術科や体育科の先生に相談するなどして情報を集め、試験に備えて練習や準備をしておきましょう。

★大学入試センター試験や私立大学の「リスニングテスト」

センター試験では、英語でリスニングが必修になっています。私立大学では、文学部英文学科を中心に、リスニングを課すところがあります。志望する大学の入試要項で必ず確認すること。

《傾向と対策》

図や表と本文を照応させるなど、様々な工夫を凝らしたものがあります。センター試験は英検準2級程度といわれていましたが、3年前から若干難度が上がりました。また、一部の大学では二次試験で課すところがあり、過去問などで傾向をつかんでおく必要があります。

ラジオ・テレビの語学講座や市販のリスニング教材などを活用したり、英語検定・TOEICに挑戦したりするなど、日頃から訓練しておくことが大切です。

5. 短大をめぐる最近の状況

(1) 学科の内容

- | | | |
|----|-------------|--|
| 文系 | ・文、教養、外国語系統 | : 文学、国文、外国語、教養、文化、人文、社会など。 |
| | ・法、商、社会学系統 | : 法学、経済、経営、経営情報、情報処理、秘書、福祉など。 |
| | ・教員養成、保母系統 | : 初等教育、保育、保健、体育など。 |
| | ・芸術系統 | : 美術、写真、デザイン、音楽など。 |
| | ・生活科学系統 | : 家政、食物、栄養、被服デザイン、住居デザインなど。 |
| 理系 | ・農学系統 | : 農学、畜産、園芸、造園、農業工学、醸造、農業経営など。 |
| | ・理、工学系統 | : 機械、自動車、電気、電子、情報工学、情報処理、土木、建築など。 |
| | ・医療、保健系統 | : 看護、衛生技術、保健、臨床検査、医療秘書、理学療法、作業療法、放射線、鍼灸など。 |

(2) メインは推薦入試「私立短大」

少子化、4年制大学人気の影響により、各校とも定員確保の手段として、推薦入試定員を一段と広くしており、高校での成績＝評定平均値をあげる努力が合格と直結しています。

(3) あまり知られぬ「国公立短大」

学科の種類が少なく、多くは国公立大学の医療技術短期大学部（看護学科3年制）という実態もあり、あまり知られていません。一般入試は各校独自で行われ、センター試験は利用しませんが、私立と比べて受験科目が多く（看護系は4科目）、募集人数も少ないので、かなりの難関です。

(4) 女子の就職状況

最近の就職状況は厳しいものがあります。しかし、短大卒の就職率が悪いかといえど一部の研究職、専門職、総合職以外ではそうでもないようです。内容にもよりますが、近年、就職率を90%台に乗せている短大も少なくありません。ただし、入学後1年もしないうちから就職活動に追われることを覚悟しなければなりません。具体的な就職状況も細かくチェックして下さい。

(5) 資格の取れる学科への集中

就職難を反映して、資格が取れる学科への人気は依然高く、保育士や幼稚園教諭免許の取れる幼児教育系、栄養士資格の取れる栄養系、歯科衛生士資格の取れる歯科衛生士や介護福祉士などの資格の取れる福祉系の学科では高倍率が続いています。

(6) 依然続く入試改革

近年、多くの短大で推薦入試からの学科試験の廃止、指定校制の導入などの入試改革が行われてきました。推薦基準の切り下げ、一般入試での1教科受験導入などの変更はまだ続いています。また、自己推薦の一つであるAO入試、スポーツ推薦、有資格者推薦、一芸一能推薦などのいわゆる「ユニーク推薦」も増加の傾向にあります。

(7) 4大への編入制度の充実

4大併設校では文化女子短大、拓殖短大などのように、短大からの学部3年への編入を優先的に行っているところもあります。従来、編入試験はどこでも大変難しく、一握りの上位の者しか編入できませんでしたが、最近編入がかなりしやすくなっているようです。一方、4大を併設していない短大では、他大学からの指定校推薦の指定を受けて、推薦編入を積極的に行っている短大もあります。短大進学を考えている人は調べておきましょう。

(8) 一般入試結果

かなり前から短大離れの傾向が続いています。中には一般入試でも定員割れをした短大もあります。この結果、定員枠の決まっている推薦入試で落ちても、一般試験ではその1ランク、2ランク上の学校がねらえるという状況になってきています。2期入試、1教科受験など、受験チャンスは大幅に広がっていますから、指定校推薦をねらうからよいなどと安易に妥協せず、自分の目的をしっかりと定めて学習に取り組んで下さい。

短大の文系の一般入試の大半は国、英の2教科型になっていますが、最近1教科型も増えました。看護・医療系は国（現代文）、英が必須で、数Iか理（生、化、物のうち1）の選択となっているところが多いですが、各短大で多様なので志望校の受験科目を調べておきましょう。短大は入りやすくなったといわれていますが、名門短大や看護・医療系は依然として難しい状況が続いています。

6. 一般入試 受験校の決め方

(1) 自分の実力を知る

校外模試などの偏差値を確認し、自分の実力を知ります。ランキング表などを見て、学校の難易度と同程度の偏差値であれば、合格可能性は60%ということになります。(難易度は予備校や出版社によって若干異なり、また、年によって多少の変動があります。)

(2) 併願校を考える (5～6校は受験する)

- ・ **チャレンジ校** (1～2校) : 自分の偏差値よりも5～10高い大学
短大はかなり高めにチャレンジすることも可能。
- ・ **実力相応校** (2～3校) : 自分の偏差値と同程度(±5)の大学
- ・ **安全校** (1～2校) : 自分の偏差値より5～10低い大学

☆いずれも「合格したら入学する」という気持ちのある学校を選ぶこと。

「合格しても行く気はない」ような学校は最初から受験しない。お金の無駄です。

☆これはあくまでも基本。早いうちから担任の先生などに相談し、自分に合った受験校を選びましょう。

(3) 受験日程を組んでみる

試験日が重複している大学、学部は、難易度などの条件が同じならば、どちらか、あるいは両方とも受験生が減り、倍率が下がる傾向があります。体力的に、精神的に、無理な日程は組まないことです。

(4) 偏差値だけでなく、倍率、合格定員なども検討する

「隔年現象」といって、前年の競争率が高い(低い)と翌年は低く(高く)なる現象があります。ただし、倍率が高ければ難しく、低ければ易しいと単純には考えられません。競争率の変動には理由(科目数や範囲の変更、受験機会の増減、定員の増減など)があり、とにかく「入れればいい」と倍率の低さだけを目安に受験するのは間違いです。

(5) 女子は短大を押さえに使うことも

学科にもよりますが、短大は入り易くなっています。大学志望でも、浪人が不可能な場合など、短大を選択肢に加えることを勧めます。

★私大の入試日程

4月	入試科目の発表開始	オープンキャンパス	
5月	↓	入試説明会	指定校推薦の依頼開始
6月	↓	AO・自己推薦	
7月	入試要項発表	↓	
8月	募集要項配布開始	↓	
9月	↓	↓ 一般推薦募集	指定校推薦募集および校内選考会議
10月	↓ センター試験出願	↓ 出願	指定校推薦募集および校内選考会議
11月	↓	↓ 試験	指定校推薦出願・試験
12月	一般入試出願開始		
1月	↓ センター試験 一般入試 (I期)		
2月	↓		
3月	↓ 2次募集・II期試験		

(6) 既合格者の来春一般受験

秋にAO、推薦で合格、内定した後、「挑戦…」「力試し…」「記念…」などの名目で、受験を希望する例が時々あります。気持ちは分からなくもないのですが…

①センター試験は受験可。10月に既に受験料を払っています。

②他は禁止します。難関の、隠れ第一希望校に合格した場合、心が揺れるのは目に見えています。社会的な約束＝「専願」合格は辞退できません。これは厳守しなくてはなりません。

結局、秋の推薦受験シーズンに、妥協をしないで頑張ることです。

◎専門学校

専門学校の場合は、書類審査のみ、書類審査プラス面接、書類審査プラス面接プラス学科、実技試験などパターンが色々あります。学校によっては推薦入試で入学定員のほとんどをとるため、一般入試の倍率が高くなる場合があります。その場合は事前に進学先について十分な検討をして、推薦入試で受験することを勧めます。

一般的に言えば、看護・医療系は難関であり、美容系、幼児教育系、製菓系、美術系の中にも難しい学校があるので、安易に考えてはいけません。看護・医療系の受験科目は国（現代文）、数Ⅰ、英、理（生物か化学か物理）の4教科型が主流です。理科がないところも増えていますが、入学後のことを考えると理科も大切です。

◎準大学

文部科学省所管以外の学校ですが、大学卒、短大卒に準ずるものとして次のようなものがあります。入試の難易度は、4年生の大学校の場合、通常の国公立と同様、かなりの難関です。

(ア) ※防衛医科大学校（6年） ※防衛大学校 ※航空保安大学校（2年）
※海上保安大学校 ※気象大学校 水産大学校
職業能力開発大学校（相模原市）など。

(イ) 港湾職業能力開発短期大学校横浜校 神奈川県立産業技術短期大学校（横浜市）など。

（※印の学生は国家公務員の身分になり、給与か手当が支給されます。）

◎職業技術校

職業技術校では、就職に必要な専門の知識と高い技術を学び、各種の資格を得ることができます。その点では専門学校と共通ですが、次のような特色があります。

①ほとんどが公立で、施設・設備が整っている。

②入校検定料は2,200円。入校料は5,650円。授業料は、1、2年コースで年間約12万円、6ヶ月コースは原則として無料。教材費は個人負担。経済的に楽。

③学生割引が適用される他、学生生活は普通の学校と同じように楽しめます。

◇入試について

高卒程度対象の科では、学力検査と面接が行われるのが普通です。科目は国語、数学の基礎的な問題で英語が加えられることもあります。倍率は科によって異なりますが、かなり高めです。推薦入試も高倍率です。

◇神奈川の職業技術校

県内には、横浜・秦野・相模原など5校、22コースが設置されています。訓練科は学校ごとに異なり、また定員も10～40名と少ないです。工業系・建築設備などを始め、情報処理・電子技術・ビジネス実務・福祉など専門学校と同じような科がそろっており、就職もほとんど専門分野へ100%進んでいます。

訓練期間は6ヶ月から2年ですが、主として高校卒業生を対象にした養成訓練課程は1～2年となっています。学習内容も高度になっており、能力と適応性が必要とされているので、目的をしっかりとって選択して下さい。

※各職業技術校についてはキャリア担当の教員に尋ねて下さい。

◎通信教育（大学通信教育の教育方法と学習について）

卒業所要単位4年制124単位以上（短大62または67単位以上）の4分の3を通信授業によって履修しますが、科目の学習がすむと大学または全国主要都市で監督実施される科目試験を受験して単位を修得します。残り約4分の1は、夏期昼間3～5週間または夜間約10週間の面接授業（スクーリング）に4回（短大は2～3回）出席するなどして履修します。選考試験による1年間の通年スクーリングもあります。

